

同窓会長八カ年で現在に至る。当年七十歳になりました。四年前、慢性肝臓にて診察の結果、肝臓がんとわかり六〇%切除、結構回復して元気になり、楽しい日々を送ることができるようになりました。読んでくださった方々も、シベリアの労苦を思い出して、世の中も変わったのだから、一日でも幸せに元気で送られることをお祈りいたします。

目が覚めて 見れば嬉しや 今日も又

此の世の中の 人と思へば

### 【執筆者の紹介】

出口氏は、大正十三年六月一日、和歌山県日高郡野口村の農家の兄弟姉妹十人の中の次男として生まれました。

昭和二十年三月、満州第二三六五部隊に入隊したが、同年八月ソ連軍により武装解除され、同年シベリアの現カザフ共和国アルマアタ収容所に入れられる。

鑄造軍需工場にて約二年余り働かされ、体が衰弱し労働不能になったために、昭和二十二年六月帰国が許

されました。

出口家の長男が戦死したため家業を継ぎ、昭和二十三年より農業経営をしながら、みかんの出荷業を始め現在に至っております。

(和歌山県 久保 清三)

### 日ソ交戦・抑留記

北海道 十和田 善作

昭和十八年一月十日、在満要員として旭川歩兵二六連隊速射砲中隊に入隊。同年三月末、満州より迎える教官班長に引率され、満州東安省西東安歩兵二二連隊、通称八八部隊に転属。歩兵二二連隊は四国松山市の勇猛連隊で、初年兵係班長教官を除く他の幹部下士官、将校は、全員松山市を中心とした四国出身者。

渡満してより六カ月、初年兵教育、九月にて一期終了。終了後幹候試験あり。同集会教育に参加し、昭和十九年二月五日甲種幹部候補生として、連隊の同僚十

九名と共に豊橋第二陸軍予備士官学校に入校、同年八月同校卒業。見習士官として北部方面軍第九十一師団独立速射砲大隊に配属のため北千島に赴任。

昭和十九年八月十七日小樽到着、小樽色内町キト旅館に宿泊。実家と元の勤務先第一銀行小樽支店に顔を出し、翌日、北部方面軍へ申告のため出札する。四、五日小樽滞在の後、小樽港より梅川丸(一八〇〇トン)で出港。樺太東海岸沿いに北上、北樺太オハあたりより真東に方向転換、カムチャッカ半島に向けて航行。カムチャッカ半島の漁村の灯がチラチラ見える沖より沿岸沿いに南下。一週間目、昭和十九年八月末に北千島幌筵島相原港到着。直ちに占守島九一師団速射砲大隊、大隊長田口英男少佐に申告する。本部に二日宿泊し、第一中隊配属のため、相原港より南下、幌筵乙前に到着、第一中隊長松川義秋中尉に申告する。

第一中隊は自分と同じ函館連隊区出身の兵が多く、中隊内には小樽出身者の顔も二、三名おり心強し。

旭川及び満州での速射砲は三十七ミリ砲で三百キログラムであったが、独立速射砲大隊の速射砲は四十七

ミリで八百キログラム、したがって砲付自動車で牽引のため、中隊には輜重隊より配属された運転手もおり、なかなか多彩なり。

乙前の第一中隊は当時八垂形の幕舎生活で、食糧は野積み状態で、毎夜、熊に糧秣を持って行かれることが多く、不寝番を兼ねて警戒しておった。もちろん、北千島到着当日より毎夜のごとく、アメリカのB26などの定期便が飛来、爆撃あり。乙前も飛来通路となっておった。

昭和十九年九月より十二月いっぱい、十和田見習士官は中隊付として乙前より戦川地区へ、さらに武蔵地区に転進。

昭和二十年一月十五日、少尉に任官すると同時に、第一中隊第三小隊長として武蔵地区独歩大隊へ配属を命ぜられ、一個小隊、四十八ミリ砲二門を率いて陣地構築に専念する。北千島は一大要塞化した島と聞いてきたのだが、陣地構築はツルハシ、タガネでの手掘り作業で、洞内の灯が「トツカリの油」では、作業は遅々として進まずの始末であった。

昭和二十年四月二十八日、北海道兵力増強のため千島兵力の転用が発令され、早速各部隊は師団司令部所在の相原地区周辺への移動を開始。配属中の我が三小隊も、砲、人員共に中隊復帰し、暁部隊舟艇にて相原兜山地区烏川に移動。北海道への船便を待つ。

昭和二十年五月二十四日、速射砲大隊長田口英男少佐、独立混成一〇一旅団参謀として転出。副官森下中尉、召集解除。後任大隊長は第三中隊長特志の清野誠一大尉、副官は第一中隊長第三小隊長十和田善作少尉が拝命。直ちに占守島三好野速射砲大隊本部に申告、着任する。

当時の九一師団速射砲大隊配備、下記のとおり。

大隊本部 占守島前線隊として三好野飛行場北方

長栄山にあり

第一中隊（隊長 木下中尉） 主力は相原烏川地

区一部盤城

第二中隊（隊長 小甲中尉） 占守島左戦隊とし

て別飛沼 二小隊一個分隊は国端警備隊配属

三小隊は古鷹山別飛独歩二八六大隊桜井少佐に

## 協力

第三中隊（隊長 大野中尉） 占守島右戦隊とし

て時宗台地守備独歩二八三大隊竹下少佐に協力  
昭和二十年八月十四日、ソ連、ロバトカ砲台より小泊岬海岸のソ連難破船に向けて砲撃（射程測定のためか？）

昭和二十年八月十五日、終戦の詔書放送あり。

放送のときは雑音激しく何のことやら分からなかったが、夕方になり、日本がポツダム宣言を受諾し終戦になったことが判明。ソ連軍はロバトカ砲台より相変わらず小泊竹田浜海岸近くに射撃継続中なるも、いざれ終戦となれば砲撃もやむものと同思っておった。

昭和二十年八月十六日、北部方面軍訓示。自衛戦闘停止完了。時期は十八日十六時と規定さる。

昭和二十年八月十七日、北千島団・隊長合同会議↓  
相原師団司令部に各部隊長及び日魯漁業関係者集まり、戦争終結に関する師団指示あり。

その日、部隊長清野大尉に同行して師団に行き、午後六時ごろ師団を辞し、幌筵海峡を渡って部隊長の元

の古巣第三中隊に立ち寄り、夕食を御馳走になり、午後十時半ごろ三好野の大隊本部に帰隊する。

昭和二十年八月十八日未明、昨夜就寝してほんの間もないころ、ソ連軍が国端竹田浜に上陸の第一報入る。ソ連はカムチャツカ・ロバトカ砲台より射程を延ばして島内を直撃、この援護射撃と空軍、海軍支援のもと、奇襲攻撃上陸を強行する。我が軍直ちに自衛戦闘に移行。我が軍は上陸地点の国端岬竹田浜並びに小泊障地より四十七ミリ、三十七ミリ速射砲、連隊砲、大隊砲、重機関銃はもとより、臼砲と四領山の野砲で、カムチャツカ・ロバトカ岬砲台を沈黙させるとともに、敵上陸用艦船、舟艇を重点攻撃し十数隻を撃沈し、上陸せるソ連兵を一斉射撃するも、敵は竹田浜に橋頭堡を築き、じわじわと四領山の中心部に向かって進撃しつつ、後統部隊並びに最新兵器の揚陸をはかる。

一方、敵を水際に撃滅せよとの師団命令により、戦車第一連隊池田大佐、独立戦車一二中隊伊藤大尉の戦車六十両出撃、四領山より国端竹田浜に向かって敵を猛攻し、ソ連軍を海岸近くまで後退せしめるも、敵

の揚陸せる対戦車火器により我が軍の損害も多くなり、燃料補給の関係もあり、午前九時三十分、四領山南側に集結する。

このとき既に我が軍戦車十八両擱坐、連隊長池田大佐以下二百余名戦死する。

#### 九一師団速射砲大隊戦闘状況

本部 敵上陸と共に各中隊に連絡を取り、師団情報並びに旅団情報を詳細に伝え、最後の行動を指示 本部は武装して直ちに大観台に

#### 直行、指揮

第一中隊 一部を幌筵盤城に残し大観台へ進出、

#### 戦闘加入

第二中隊 主力は天神山に対し戦闘準備 第二小

隊一個分隊は国端岬にて激戦中

第三中隊 独歩二八三大隊に協力し、四領山南方

楠川の九七高地で戦闘加入

昭和二十年八月十八日午後一時、歩兵七三旅団の独歩二八三竹下大隊、独歩二八四野口大隊は、四領山の独歩二八二村上大隊を援護すべく未明より激戦中。他

方、左戦隊の別飛地区独歩二八六桜井大隊、独歩二八八橋口部隊、独歩二八九山田部隊、独歩二九一數田部隊は天神山、大観台、楠川の線に展開、四領山方向に對し逐次戦闘加入、敵を圧迫する。

昭和二十年八月十八日午後四時、九一師団長堤中將の決断により戦闘停止命令あり。直ちに軍使の派遣を企図するも、両軍の戦闘止まず。軍使は先に進めず、九一師団司令部付軍使長島大尉は、夜陰に乘じ単身敵地に潜入、敵との連絡に成功する。

昭和二十年八月十九日五時三十分、軍使竹田浜ソ連陣地へ出發。午後四時、第七三旅団杉野少將、師団司令部柳岡參謀長、鈴木防空隊長、加瀬谷第一砲兵隊長、高橋師団副官、清野通訳により、一応ソ連軍との停戦交渉成立するも、九一師団長堤中將は武装解除の条件を承認せず。

昭和二十年八月二十日早朝、柳岡參謀長、停戦交渉破棄（武装解除の件）、再交渉に望むも、ソ連軍承知せず。この間、たびたび敵の來襲あるも、我が軍これを撃退する。また、停戦中も前線では射撃の応酬激しく、

七三旅団よりの嚴重なる停戦嚴守の命令にもかかわらず、相互の撃ち合ひは相変わらずの情勢なり。

また、注意すべき事項、下記のとおり。

注 その一 昭和二十年八月十八日夜、戦闘第一夜を迎え、我が軍斥候によれば、敵は日本軍を先頭に立て前進して來るとの報告あり。それはカムチャツカ日魯漁業関係者の男子か、敵上陸地点で捕虜となつた我が軍の兵士か？ いずれにしても、よく見きわめて戦闘するよう指示あり。

しかし、後刻判明する。先頭に立つた日本兵とは、海没してようやく上陸したソ連軍が、独歩二八二大隊倉庫にあつた日本軍服その他を着用して前線に進撃していたことが判明。

注 その二 昭和二十年八月十八日夜、大観台においては各独立大隊本部・旅団、その他直轄部隊の速射砲、山砲、大隊砲、重

機等が密集しておつたが、敵は偽装陽動の作戦を行い、我が軍集結地の右に左に裏側に瞬時姿を現わし、一晩じゅう、砲の移動転換に精力を集中し、消耗戦を強いられた苦い経験が思い出される。

昭和二十年八月二十一日、午前六時を期し攻撃再開の命令あるも、直後、北部方面軍より武装解除、武器引き渡しの容認、即時停戦の返電が届き、間一髪完全停戦実現する。(以上、北千島慰霊の会発行「戦闘小史」より一部抜粋の箇所あり)

昭和二十年八月二十一日午後、停戦協定により各部隊、三好野飛行場まで後退する。折しも降雨激しく、道泥濘と化す。ソ連軍に翌日の武器引き渡しを拒み、爆破あるいは崖より投棄する部隊あり。ソ連軍より崖重抗議を受ける。

昭和二十年八月二十二日、占守島三好野飛行場に各部隊、武装解除のため集結するも、正式解除は翌八月二十三日となり、各部隊散開する。

昭和二十年八月二十三日、武装解除のため部隊集結の折、速射砲大隊本部佐々木上等兵、小銃にて自決する。毛布に包み、壕に仮埋葬し、武装解除に臨む。

昭和二十年八月二十四日、武装解除後、佐々木上等兵の遺体を三好野飛行場の滑走路の一部において木材を積んで焼却を行う(三好野飛行場滑走路は板敷き滑走路)。たちまちソ連軍より旅団・師団を通じ即刻停止するよう申し入れあるも、火勢盛んにして直ちに消火できず、続行する。ついに、ソ連騎馬兵二、三人現われ、抗議を受ける。当方、手振り身振りで意味を説明するも効果なし。押し問答の末、ついに焼却終了して一件落着する。

昭和二十年八月十八日未明より停戦までのソ連軍戦死者は約三千名、日本軍戦死者三百五十名。ソ連国営通信イズベスチャ小紙は、満州、朝鮮、樺太における被害の軽微に比し、占守島の戦闘は意外にも被害甚大であり、八月十八日はソ連の哀日であると社説で慨嘆したという記事があった由である。

ソ連軍は、千島占領後、釧路より留萌に至る線の北

部北海道へ上陸を企図するも、米国トルーマン大統領の拒否に遭い、急遽、スターリン元帥の命令により、日本軍の健康な男子五十万人（実際は六十万万人）を千島、樺太、朝鮮、北支よりシベリアに移送せよとの方針に変更し、下士官、兵千名を単位として梯団を編成し、逐次移送を開始する。

ソ連軍と直接対戦せる部隊は、特にマガダンその他奥地に送られ酷使され、厳寒に抗し切れず多数の死者を出したと伝えられている。

我々将校団は現地に固定監視され、昭和二十一年一月一日午前零時、占守島長崎港よりソ連七千トン級船舶に乗船、東京ダモイにつく。

#### 捕虜となる

船は静々と北海道に向け航海に就く。船内では今日の昭和二十一年元旦を祝うべく、ウルチ米でつくったドブロク、餅などを開いて祝宴を張る。結果的に祝宴でなく、残念会であったことが十二、三日後判明する。昭和二十一年一月四日、樺太大泊港着、港内で一週間余停泊する。港内の船より大泊の北海屋（ホテル）

の煙突が見える。速射砲大隊第二中隊熊谷少尉（函館出身）の父の経営するのが大泊北海屋であり、「ああ、俺の家、俺の家」と熊谷少尉が慨嘆するも、すべなし。

一月十二、三日ごろ、静かに船が大泊港を離れる。

今度こそダモイだろう。左側は北海道、右側は沿海州。「神よ、東京ダモイをお願いいたします」、乗船する将校団一同の願いは同じ。船はいよいよ速度を上げて南下する。

#### 入ソする

昭和二十一年一月十六日早朝、全員の願いも空しく、船はソ連沿海州ナホトカに入港する。占守島における終戦までの経路については今もなお鮮明に記憶にあるも、ナホトカ到着以来、落胆の故か、日時、場所その他確たる記憶なく、多少相違あるかもしれませんが、記憶のまま記載する。

昭和二十一年一月十六日、十七日は、ナホトカ港近くの丘陵地帯に設けられた急造二段式幕舎に仮眠するも、軍服着たままに持参せる陸軍毛布一枚のため寒く寝られず。ベチカの燃料採取のため、近くの山より

灌木採取を行う。もちろん腰の軍刀を抜いて薪狩りである。

昭和二十一年一月十七日、北千島占守島以来、持参許可のあつた各将校団の軍刀、眼鏡、その他兵器は、本日をもつてソ連軍に取り上げられる。以後、丸腰の徒手空拳である。

昭和二十一年一月十八日、早朝よりナホトカに上陸せる将校団の一部は貨車に乗り、ナホトカ北方三百キロメートルのスパスクに移動する。ここは広大な煉瓦乾燥工場の建物らしく、急造の木造二段式ベッドに着衣のまま、持参の毛布一枚にくるまり横になる。ナホトカの急造幕舎よりは風もなく落ち着く。なお、大きなペチカを不寝番を立てて終夜燃やして暖をとるも、とにかく寒さ厳しく、屋外は零下四〇度。寒さのため小便に起きる人多くおるも、便所は建物より五十メートルくらい離れた位置にあり。その廁まで我慢できず、建物入口の前で放尿するのがほとんど。はなはだしきは、ベッドより出で、建物入口までの通路で放出する者まで続出する。さあ大変、朝になると通路は凍つて

テカテカ。入口は小便が凍つて、鍾乳洞の鍾乳石の筈のごとく天に向かつて何本も何本もできており、小便が凍りついて上に上に高くなる現象はまことに壮観なり。ソ連軍女医が見回りに来て、「グリーヤーズヌイ、グリーヤーズヌイ」(汚い、汚い)と、怒ること怒ること。早速ツルハシで全部削り、便所に捨てて一件落着。ただし、翌日も翌々日も毎日同じことの繰り返しである。

起床六時、さあ、朝の点呼がまた大変である。建物外の広場に整列、常に四列縦隊、収容所長と係官二人による人員点呼。初めは目で、アジン(一)、ドヴァー(二)、トリー(三)と数えていくが、途中でわからなくなり、最初に戻り、次は指差しで、アジン、ドヴァー、トリー。また途中でわからなくなり戻る。今度は一列ずつ手で触つて勘定し、そのまま隊列を残して衛門に戻り、四×〇〇列〇〇人、鉛筆で計算し、解散の合図。朝の寒さの中、三十分以上も待たされ、全員はガタガタ足踏み。解散の合図とともに一斉に便所へ急行が毎朝の行事である。一月の空は青々と澄みわたる太陽の光りがキラキラと輝いているが、しかし下水



の水はカチカチに凍りついた現象である。水の補給は給水車により、コップ一杯の水で口をすすぎ、顔を洗うわけである。

作業は、夜中あるいは日中、あるいは夕方、満州より物資を運ぶ。ソ連の貨車、少なくとも百両以上連結の貨車の中より、ソ連軍の指示に従って必要物資をおろす作業が主力である。おろす物資は、麦粉であったり紙であったり味噌であったり、さまざまである。また、貨車の物資はバラの粉付き米あり、鉄屑あり、紙、麦粉、日用雑貨、機械類その他諸々の物資根こそぎの搬出であり、毎日毎日、何百両の貨車が続々とシベリア鉄道を通過していく。満州の物資が藻抜きの空になったと聞いたが、さもありませんと思う。

作業はまた、鉄道物資の下ろし以外、近所のコルホーズ、ソホーズへの農作業である。たとえば、凍りついた堆肥を金でこで一メートル四方、即ち一立方メートルを掘り崩して畑に撒く作業が一日一人当たりのノルマである。しかし、酷寒の中、凍土を一立方メートル崩すのは簡単にできることではない。むしろ、無理

というものである。カンボーイはノルマを完遂しなくとも文句は言わないが、日本のごとく四十五分作業、十五分休憩というわけにはいかない。とにかく休めば怒る。のろろでも常に動いておれば、歩哨はハラシヨ、ハラシヨである。

日中、作業のない者は、一日じゅう少しでも動かさないよう、カロリーが損失しないよう、自分の寝台に横になり、じっとして夜寒さのための睡眠不足を補填するわけである。また、一番の楽しみは三度の食事であるが、いわゆるカーシャ（日本流お粥）は若干の脂肪分と岩塩で味付けされており、馴れば大変美味ではあるが、何せ量が不足で、腹はいつも空腹の状態である。カーシャは美味といっても、材料にもより、米麦のカーシャは稀で、燕麦、馬鈴薯、高粱などではお世辞にもおいしいとは言われない。量は平均〇・七リットル、一リットル（七百グラム、千グラム）の間で、馬鈴薯のような栄養価の少ないものは、時に千五百グラムのときもある。このカーシャと一人三百グラムの黒パンが一日一回支給される。この黒パン（枕パン）

は、三キログラムのものを七つに分配するから、一個三百グラムといつても三百グラム強ということになる。この分配がまたいろいろで、並べたパンを取るための順番の順番を決めたりして、各人はまことに真剣である。

このほか、一日砂糖少々と、月何回か煙草の配給がある（主にマホルカ）。これを新聞紙片に包み込み、ツバをつけてとじ、火をつけて吸うわけである。四十何歳までたばこを吸わなかったのに、腹の足しにと吸い始めた人も多々いる次第である。

次に記録しなければならぬことは、各ラゲルとも、月に何回も突然「東京ダモイ、整列」を掛け、私物検査である。持ち物のうち、刃物は完全に没収されることは別として、この折、衣類その他の私物を徴集されることしばしば行われる。入ソして、私物を一切徴集されず、将校行李（こぶち）をそのまま持ち帰った部隊もあれば、ほとんど取られて着の身着のまま、水筒と飯盒だけで帰国した者もいる。私は差し当たり後者である。ただし、途中、衣類の一部を市民のパンと交換し

て食べた人もかなりおられることは間違いない。

昭和二十一年三月下旬、スパツスク駅より乗車、西へ西へと走り止まり、走り止まりを重ねて約一カ月、モスクワ南方四百キロメートル、タンポフ州ライダー収容所に到着する。この収容所には既に日本将校の先客がたくさんおり、中には参謀肩章を掛けた上級の日本将校もおり、壮観なり。

この収容所での作業は主に道路建設（戦捷道路、高さ二メートル、上幅七メートル、二車線の道路）であり、建設機材は国家所有のシャベル（厚手の鉄板でできており、柄は太目の木の枝でできているもの）、さらにモッコ（やはり、太目の木の枝二本に七十センチメートル四方の板を打ちつけたもの）のみである。モッコに土を載せ、前後二人で道路用地に土を盛り上げていく。土は道路用地以外のところの平地を掘り、それを運ぶわけである。毎日の作業人員が五千人から七千人。長い軍人用マントを着た人やら、防寒外套を着た人、いろいろである。この五千人と七千人の作業現場への往復はもちろん徒歩で、濛々たる砂煙（もうもろ）を上げ、遠

くからでも一望できる。

まことにアリババの行列のごとしである。こんな道具で、やる気のない捕虜の作業で果たしてできるのであるか？と疑う者は私一人に非ず。初めはほとんど不可能のごときものであったが、餓鬼も人数とか、三カ月後は何とかそれらしき形を成して行くではありませんか。驚くばかりであります。作業のない人は炊事の水汲み、ボーチカ(樽)を二人で担いで沼より水を汲んでくる。また、郊外の森へ行って薪を取ってきて炊事に積み上げる。これも一人小枝一本ずつでも、五千本、七千本は塵も積もれば山となるの例えどおりである。

昭和二十一年七月初旬、全員移動の命令あり。焼き付ける太陽の下、東へ東へと行軍また行軍。見渡す限りの平原、地平線の彼方、また地平線が現れて際限なし。食事はカーシヤと例の黒パン。炎天下三日間歩き通しての夕方、タタール自治共和国のエラブカB收容所に到着する。

エラブカはボルガ川支流カマ河河畔に位置する。口

シア帝政時代の監獄の跡とかの話あり。この收容所には日本将校はじめ、ドイツ、イタリア、ハンガリーなどの外国人捕虜もおり、総勢一万人くらいいるとの話あり。祖国を離れて何千里、北欧ボルガ川河畔に来ているとは故郷の人たちは思いもつかないことだろうと思う。

疲れ切った我々部隊がエラブカBラーゲルの衛門近くに集結した折、收容所の炊事用具らしき四、五人の男が車で粉を運んで通りかかる。突然その中の一人から「おい、十和田、十和田」と呼ぶ声あり。びっくりして見れば、小樽庁商時代の同級生鈴木金太郎君で二度びっくり。彼は終戦時、樺太要師団司令部少尉で、既にこの收容所に来ていたことに三度びっくり。とにかく知人が一人ふえたことで、私も彼も一安心。收容所に落ち着き次第訪ねるとの約束で別れる。

翌日、鈴木金太郎君が訪ねてきて話すには、この收容所より夏冬とも伐採作業のため山に入るラポーターが多々あり、従来はかなりの事故被害が出ているので、收容所内の作業につくのが最適であり、もし希望すれ

ば炊事のキャピタンに頼んでみるがとの親切な話あるものの、炊事はだれしも行きたいところであり、自分だけが行く気になれないので、もしできるなら湯わかし場に斡旋してもらえれば幸いと希望を述べ、彼の奔走で翌日より湯わかし場勤務となる。炊事、湯わかし場、洗濯場の人事権は炊事のキャピタン米村大尉の胸一つにあり、感謝感謝で毎日を過ごす。

ある日、炊事用具、湯わかし場、洗濯場の人員二、三十人くらいで、炊事の薪づくりを行う。薪は松の直径七、八十センチメートル、高さ三十センチメートルくらいの丸太二十から三十個。タポール（斧）で割り作業である。しかし、力だけではどうしても丸太を割り切れない。ついには、タポールが丸太に食い込んで抜けない始末である。大男が何人も交代するが結果は同じで、ついに私の番が来る。私の生家は柵屋とらやであり、丸太の松の原木を柵にする過程で、いつも見なれたもの。門前の小僧何とやらで、タポールの刃は常に木のフシを避け、木の芯に向かって柵目に刃を入れることが肝要で、物の見事に始末するに及んで、キャピ

タン米村大尉並びに一同大驚き。早速湯わかし勤務ではもつたない、炊事に勤務するようにとのキャピタン命令で、炊事に勤務することになる。

炊事は、外人は別として、日本人将校数千人分を朝昼晩三交代、一交代十五人前後で作業する。もちろん、いろいろな材料によるカーシヤである。カーシヤができ上がれば、一食ごとに炊事内床の水洗い、カッター掛け、ビン尻でのツヤ出し作業を行い、ソ連女軍医の試食を整え迎えに行く。軍医来て、まず窓のサンを指で拭き、汚れていれば清掃作業のやり直しである。試食合格後、カーシヤをポーチカに汲み取り食堂に運ぶわけである。ソ連は当時、薬品類も不足を来しており、捕虜の健康管理はあくまで間接衛生である。

昭和二十二年四月、エラブカ收容所内日本軍将校の一部、船でカザンに移動。我々も炊事を出て、エラブカより一日行程のポロシヨイポールの作業工場に到着。原木運搬に携わる。一人一立方メートル、四、五人が組となり、荷車に原木を積み、山よりカマ河畔の流送地まで運ぶ作業である。日本人は何としてもせつち

である。早く運んで早く帰着し、早く休みたいの願望。上り坂など先車を出し抜いて駆け上り、休まず作業を終わり帰る。作業が早く終わるので、ソ連の係官は翌日ノルマを増すわけである。その点、ドイツ人将校は運搬車五、十台を指揮して、ゆるゆるの時間いっぱいかかって運搬する。上り坂にかかれば全車停止、全員先頭車に集まり、全員で一台ずつ坂の上に運び、次々と運んで全車を坂の上上げた後、また静々として流送地へ行き、帰路も急ぐ気配もなく時間内に作業終了となる。日本人の氣質が案外、栄養失調の原因の一部をなしたのではないかとも思われる。

昭和二十二年五月下旬、再びエラブカ収容所に戻り、あちこちのソホーズ、コルホーズの農作業に従事する。

#### ダモイ東京

昭和二十二年十月十日、いよいよエラブカ収容所を出て、一日行程のキズネール駅に行軍を開始する。時既にもぞれが降っており、寒い雨中黙々と進む。特に夜に入り、真つ暗闇の土砂降りの中、隊列より離れまいとして必死に歩いた記憶がついこの間のような気が

する。東京ダモイの最後の踏ん張りだったのだろう。キズネール駅より東へ東へ、元来た鉄路を逆に進む。

昭和二十二年十一月初旬、鉄道はバイカル湖湖畔に停車する。「塩の湖バイカル湖」と歌われる広大な湖。湖というより海である。渚は既に積雪あり。二度と来ることのないバイカル湖湖畔にて顔を洗い、水をなめてみる。心なしか塩辛い味がした。

捕虜のいるところ必ず一般市民が集まり、ダワイダワイと商売が始まる。年老いた老女が、バイカル湖で獲れたと称する鱈の塩蒸しを売りに来る。肌着一枚を脱ぎ鱈と交換し、鈴木金太郎君と二人で食べる。もう故郷が近いためか、心うきうきである。

エラブカを出発して約一カ月、二十二年十一月十日ごろナホトカに到着、八錐形天幕にて二日ほど過ごす。日本兵によるシベリア民主組織の者たちのアジ演説を聞かされ、さらにはインタンナシヨナルの合唱、ソ同盟に感謝の署名等々、公式行事を重ねる。

ナホトカ港岸壁には既に日本の船が着岸しており、乗船の順番を待つ。ここ一番、共産アクチーブたちに

何と言われようと堪忍袋の緒を締めることが肝要と心に期す。いよいよ乗船の順番が来てタラップを昇る。

このはしごからは日本である。船内に入り、久しぶり、二年ぶりの日本の新聞、雑誌にかじりつく。ソ連共産アクチーブの演説、壁新聞、日本新聞の社説とは何と一八〇度違う意見で満ち満ちており、はて、どちらの主張が正しいものやら考えてみるが、もちろん、戦いに敗れたとはいえ、日本の主張が正しいのは間違いない。日本には民主主義の国、自由の国・米国がついていけるのだから。ソ連では、日本は食糧もなく餓死寸前とまで言っておったが、米国よりの衣料援助、食糧援助のお陰で、何とか平穩に暮らしている様子も分かり本当に一安心である。

昭和二十二年十一月十七日、北海道函館港に入港、船は長運丸?である。上陸後三日間は函館市内の兵舎で検疫やら申告やらで過ごす。また、軍隊時代の軍服上下、肌着上下、褌、帽子、巻脚絆、軍靴一足、メリヤス肌着上下、毛布一枚など十一人と金員千円を受領して、上陸より四日目、帰樽する。

昭和二十二年十一月二十一日午後四時小樽駅着。

小樽駅構内では、復員者を迎える人の波でいっぱいである。しかし、私を迎える父母兄弟の姿はなく、何となく一抹の不安を覚えながら自宅に向かう。

「国破れて山河在り 城春にして草木深し」の詩の一節があるが、我が家を取り巻く山々の唐松林の美林は伐採されて丸裸、昔の面影はない。自宅に着いたが、両親の姿はなく、聞けば、終戦後相次いで死去したという。

昭和二十年五月二日、終戦を目前にして予科練の六男の弟、戦病死（十八歳）。また昭和二十年八月十五日早朝、少年航空兵で満州におったはずの五男がよれよれの軍衣姿で玄関に着き、終戦の第一報を両親に伝えたと。また、終戦後、九月に入り長兄鹿兒島より復員。次いで、次兄も帯広熊部隊より復員。両親は長い間の張り詰めた気も緩み、昭和二十一年六月八日父が、翌月七月六日母が相次いで急逝せる由。母は最後まで未復員の三男（近衛四連隊スマトラ）、四男（ソ連抑留）の私たちの身を案じながら目を閉じたという。

心待ちにしていた両親との再会の機会を失い、また最愛の末弟を亡くして、シベリアの疲れが一度に吹き出した感じがした。しかし、終戦の混乱の中、くじけてもいられないと思ひ直して、翌日、出征前勤務していた銀行へ復員あいさつに行く。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十一年一月十一日

生育地 北海道小樽市

趣味 旅行、囲碁、詩吟

履歴

大正十一年一月十一日

六男二女八人兄弟で、

父十和田与一、母十和

田ミスの四男として北

海道小樽市に生まれる

小学校卒業後、庁立小

樽商業学校に入学

昭和十四年三月

同校を卒業と同時に株

式会社第一銀行小樽支

店に入社

昭和十七年徴兵検査

甲種合格

昭和十八年一月十日

旭川歩兵二六連隊速射

砲中隊に入隊

昭和二十一年一月十六日

入ソ

昭和二十二年十一月十七日

北海道函館港に入港

昭和二十三年二月一日

株式会社東和ゴム入社

(昭和三十年倒産)

昭和三十年

株式会社荒田商會に入

社

昭和六十二年三月

株式会社荒田商會を停

年。同年、株式会社小

樽花嫁センター代表取

締役として現在に至る

家族

妻・二男一女(いずれも独立妻帯し、孫七人)

(北海道 森 英一)

## 私の抑留記

東京部 小野 正大

昭和十九年八月一日、浜松の中部第九十七部隊に現役志願兵として入隊しました。九十七部隊は爆撃機の部隊でしたが、掩<sup>え</sup>体壕には飛行機もなく、一週間おりましたが飛行機は全然飛びませんでした。その間、身体検査や身の回りの不要な着物を家に送る準備をしました。いよいよ明日満州に出発となりました。

当日五時起床、制服に着替えゲートルを巻く、これが難しくて一番苦労しました。そして本部前集合し部隊長訓示、その後各配属部隊の点呼終了、出発です。浜松駅まで行軍は一時間くらいかかり、車で数時間待たされて列車に乗り下関に向かって出発しました。列車に揺られて深い眠りに入りました。当時、浜松から下関まで一昼夜くらいかかったと思います。

下関に着くと全員下車し、再点呼終了すると今度は

船に乗り込みました。船は一時間後に出航、日本海は波穏やかで揺れもなく楽でしたが、全員無言でじっと物思いにふけていました。家族のこと、友達のこと、恋人のこと、思いはそれぞれだったと思います。

釜山港に着き上陸すると異様な臭いがしてきました。動物の腐ったような、原因はわかりませんが、鼻について御飯がのどを通りませんでした。腹が減っていたので、我慢して弁当の半分ほど食べましたが、翌朝腹が痛み出して目をさまして便所に飛び込みましたら、やはり下痢でした。弁当が腐っていたのだと思います。

釜山から列車に乗り、車中から眺める景色はいたって平凡でした。何日か列車に揺られ四平街で下車し、同年兵十人ほどで関東軍第四十二教育飛行隊に配属。練習機も十数機ありました。兵舎はカマボコ型で中は狭く、すれ違うのがやっとなという感じでした。

その部隊で数日初年兵教育を受け、吉林省の延吉に派遣されることになりました。入隊以来二週間くらいは上げ膳据え膳のようなものでしたが、延吉の教育隊